

実情隠す一家救えるか

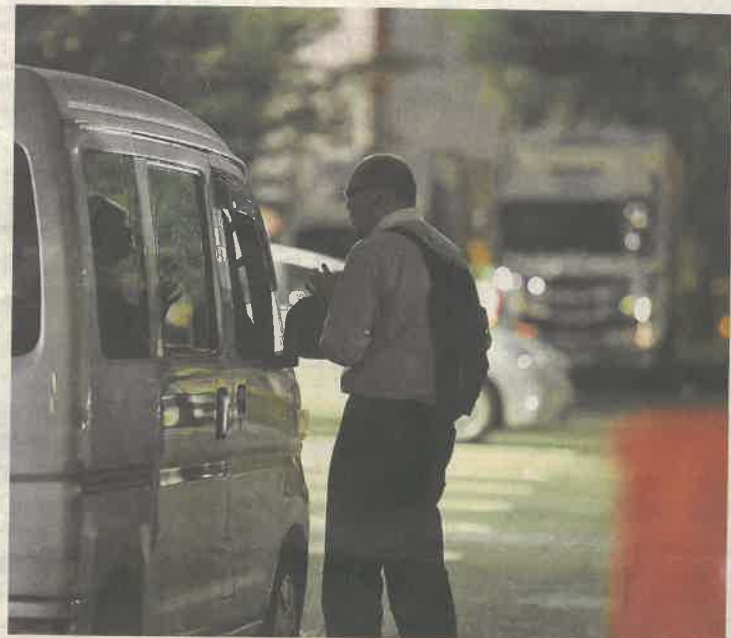
ホームレスは、どこへ行った

— 岐阜の現場から —

第3章

5

8月になった。連日、昼間は35度以上の猛暑日。夜も寝苦しい日々が続く。岐阜市柳津町仙石城の道の駅「柳津」にいる車上生活者の過ごし方にも変化が出始めた。空調の効いた商業施設などで閉店ギリギリまで時間をつぶすのだらう。道の駅の駐車場が埋まり始める時間帯が、午後9時ごろに後ろ倒しになってきて



日が暮れた後道の駅に集まってきた車上生活者に声をかける井田真也さん。7月、岐阜市柳津町仙石城道の駅「柳津」(撮影:坂井萌香)

「こんな生活を続けていたら、命にかかわるよ」。障害者雇用を展開する名古屋市の民間企業で、居住支援を担当する井田真也さん(56)はこの夏、柳津で「夜回り」をするようになった。元警察官で、当時から道の駅「柳津」の状況は知っていた。車の窓越しに声をかけ、生活に行き詰まった人を住まいに結ぶ居住支援という取り組みがあることなどを説明し、連絡先を渡す。数日して電話が入り、生活保護の申請同行などを経てアパートで暮らし始める人も出てきた。

一方で、そのまま行方分からなくなる人、警戒心からかそもそも話すのを嫌がる人など、声をかけた車上生活者の多くは住まいにつながないのが実情だ。

支援を試みている対象の中に、ワゴン車に乗り合わせて

認知症90歳連れ 届かぬ声かけ

連夜、柳津で過ごしている家族がいる。

車内には3人。うち一人は認知症がある90歳の女性で、決まって後部座席に座っている。60代の義理の娘が運転し、助手席にはその夫。柳津に来ると窓を全開にして車を止め、トイレでぬらした手ぬぐいを窓枠に留めて涼を取る。車の最後列は衣類や物干しなどの荷物で埋まり、3人が足を伸ばして眠るのは難しい状況だった。「家をリフォームしとるから。たまにホテルに泊まることもあるの」と義理の娘。そうした生活を、昨年10月から続けている。

井田さんら福祉関係者の話を総合すると、実際には一家に家はない。

家賃が払えなくなって、住まいを追われた。90歳の女性らの年金は入るが、金銭管理を担うのは主に、住まいがあった当時に同居していた30代の孫の男性。家を失った時点で市役所へ相談には行ったものの、孫は車を手放すのを嫌がり、市側が生活保護の受給を提案しても拒んだという。そうして、この駐車場にたど

り着いた。

道の駅では、支援はおのずと手薄になる。そもそもドライバーの休憩場所であるため車上生活者の支援を想定しておらず、公園などで支援団体が行う炊き出しなどはない。さらに、井田さんのように夜回りをして居住支援を行っても、住まいとつながった人が増えれば継続的なケアが必要なお客も増えるため、マンパワーの上でも夜回りを連日行うのは難しくなる。

「90歳のおばあちゃんだけでも助けたいけど」と井田さん。孫は別の車で車上生活をしているとの情報もあるため、何度も道の駅に通って一家と信頼関係を築きたいところだが、義理の娘が本当のことを隠したように、生活実態や今後の希望を聞き出すのは時間的にも労力的にも簡単ではない。

車上生活者には、手紙などを受け取るすべがない人も多い。市町村など行政からの手紙には税金や社会保険料の督促なども含まれるが、彼らは車内で寝苦しい夜を過ごす代わりに、それらから逃れ続けている。

井田さんは言う。「どんなに言葉を尽くしても、私を拒む人はいますから」。支援の手は、なかなか届かない。